

福川伸次氏（元大平首相秘書官）に聞く

総理時代の思索と言動

— 聞き手・阿部 穆



年末の物価状況の視察。右が福川伸次秘書官、中央の大平総理の右後ろが森田一秘書官、その右後ろが佐藤嘉恭秘書官（東京・三軒茶屋にて、1979年12月31日）

大平総理の意向で総理秘書官に

— 昭和五三年一二月に大平内閣が成立するわけですが、また福川さんに秘書官をやって欲しいという要請があるわけですが、これは総理自身の意向だったんですか、それとも……。

福川 それは私はよく知りませんが、後からいろいろ聞くと、当時、次官は濃野滋氏で、官房長は藤原一郎氏でしたが、森田一秘書官が人事の窓口をやっていて、そこらの情報を総合的に両方から聞きますと、通産省は別の人を秘書官に用意していたようです。それを二度持つて行ったと言っていますが、しかし大平さんがなかなか「ウン」と言わない、ということだったようですね。たしかに総理というと最後だから、使いやすいというか、気心が分つていいる奴がいい、ということだったんですよ。それで、本当かどうか知りませんが、話によると大平さんが「福川君はどうしているかね」と言ったという。

— その時は本省ですか、エネルギー庁でしたか。

福川 私は官房の企画室長をやつていまして、八 年代の通商産業政策という全省庁を挙げてつくる作業の責任者でした。これは、七〇年代の通商産業政策というビジョンを、大平通産大臣の頃に、つくったわけですけれども、それから一〇年近く経つたので、新しいビジョンをつくらうということになって始まつた作業です。通産省としては始めたばかりでしたから、別の人を持つて行ったのでしよう。しかし総理のご指名ならばというわけで「君、行ってくれ」ということになったわけです。

— それで秘書官に就任されたわけですが、就任されるにあたって、特別に総理から何かこういうことを頼むとか、言われたことがあったのですか。

福川 いや、特にこういうことをやってくれということはありませんでしたが、「まあ、俺がこういうことになったんで、迷惑だらうけど、よろしく頼むな」という話でしたな。

——大平政策研究グループについての話は……。

福川 最初の時は、その話は出ませんでした。が、組閣の前から宏池会を中心に、その後の政策はどういうふうにしようかというような議論は、いろいろしていましたからね。そのうちに、少しずつ政策グループの構想が具体的に出てきましたが、組閣のときに大平総理の口から特に政策研究グループの話は、出ませんでした。

——大平内閣は、五三年の一二月から五五年の六月まで実質一年半ですね。その間に、いろんなことがあったわけですけど、福川さんの担当された面では一番大きかったのは、東京サミットであつたと思うのです。東京サミットには各国の首脳がくるわけですが、そこで一番大きな問題というのは、エネルギー問題、石油問題、特にジスカールドスタン仏大統領が提出した国別輸入目標の設定という問題であつたわけですね。これは通産省がいろいろ苦勞されたと思うのですが、何でこのような問題がジスカールドスタン大統領から提起されて、それで大平総理が苦惱されたか。その辺の経緯はどうだつたんですか。

東京サミットでの大平首脳外交

福川 そもそもサミットというのは、第一次石油ショックの後にジスカールドスタン大統領が提案をして、石油ショックの対応策、その後の混乱に陥つた世界経済　あの頃は長いトンネルに入った

実といわれたわけですから、主要国がどう対応するかということでは始めたものです。それだいが良くなって、福田（赳夫）内閣の時に、ボンサミットがあつて、日独機関車論というのがいわれて、七パーセント成長を福田さんが公約してくるわけです。これがなかなか実現ができない状況になつていて、それで東京サミットで批判をされても困るし、どうするか実は悩んでいたわけです。そうしたら、一九七八年の暮れにイランで革命が起こりホメイニ師が帰つてきて、パーレビ国王を追い出して、イランが石油の輸出を止めるという形で、第二次石油ショックに入るわけです。

したがつて、そういう状況でしたから、ジスカールデスタン大統領にしてみると、石油問題で、サミットが明確な態度を示すべきだということになつてくるわけです。ですから東京サミットに入る前から、ヨーロッパは相当の要求をしてくるかも知れないという情報は、少しづつあつたわけです。しかし、日本は石油の消費を抑えろとか、輸入を抑えろとかいうことになる、日本の成長そのものが制約される、経済そのものがうまくいかない、ということがあるものですから、日本はアメリカと組んで、省エネ等を自主的に行うという形で乗り切ろうという考え方だったですね。当時、シユレジンジャー氏が、アメリカではエネルギー庁長官で、その人が少し早目に来日して、いろいろと交渉したところ、アメリカからはそう強い意見はなかつたわけです。ところが後になってみると、米・欧で何かあつたらしいということは分かるんですけれども、日米で協力をすればサミットは乗り切れると読んで、省エネと石油備蓄をちゃんとやりましようということで行こう、としていたわけです。

ところが、ヨーロッパのほうから見ると、産油国からこれだけ刃物を突き付けるようなことをやられては、キチンと対応しなければいけないという意見があつた。それはジスカールデスタンが非常に

強く主張し、ドイツ、イタリアを引っ張って、是非そういうことにしようということでした。そういう動きがありそうだということは、何となく分かってはいたんだけど、あんなに強く言うとは実は予測をしてなかった。それで、一日目が終わって二日目の夜、ヨーロッパ側がフランス大使館に集まって作戦会議をするということになって、そういう情報がちらちら流れてくるようになった。

——日本だけが蚊帳の外だったんですね。

福川 そうです。それで、いろんな人を通じて、少しずつそういう情報が夜中に流れてきました。そして、二日目の朝、向うは大統領たちが集まって対策を協議する、という情報が夜明けには明らかになったのですね。そして、産油国が供給を抑えるというのだから、消費国側も輸入量を抑えよう、そうでないか、いつまでたっても付け込まれるぞ、という考えです。ヨーロッパは、いろんな形の国際関係の長い歴史を持つ国だから、そう考えるのでしょうかね。その当時は、もしそんなことをしたら、日本経済はメタメタになってしまおうという危機感があった、田中六助官房長官は、「いや、これは大変なことになりそうだ」と言っておられました。朝七時ぐらいになって、私が今こういう雰囲気ですよと言ったら、「そんなはずはない」と言って、大平総理が烈火の如く怒りました。「外務省からそんなこと（情報）ないぞ」と言われ、それはガセネタだという感じでした。しかし、六助さんのほうは、「いや、そうじゃないかも知らんぞ。フランスなら、それくらいのことはやるかも知れない」ということで、「もし本当だったら、これを呑めば大平内閣は潰れるね」というくらいな危機感を持っていました。したがって、その情報を確認できないまま赤坂離宮へ行く、ということになった。

案の定、「規制をやれ」となる。そしてアメリカも賛成に廻ったわけです。そして日本が孤立無援

実となつた。それは困る困ると言つただけれども、「それなら日本は、いくらならいいんだ」という助け舟を、確かカーター大統領が出したんですね。そして、当時、経済企画庁がつくつた五力年計画というのがある、それに基づいて、大平総理が「それなら六九〇万バレルというならできる」と言つたら、「それでいいじゃないか」とカーターが言ってくれて、「それで行こうよ」ということになつた。一つジスカールドスタンが、「六九〇万バレルでいいけれども、できるだけ減らす方向で努力してくれよ。努力ぐらいいいだろう」ということになつて、下限が六三〇万となり、六九〇〇六三〇という二本建てになつて合意ができた、というわけです。ですから、ヨーロッパの「目には目を力には力を」という考えで、ジスカールドスタンが引つ張つたということであつたと思いますね。

——田中六助さんの遺された原稿を拝見しますとね、赤坂離宮の中の游心亭で食事をしている時に、みんなが日本食をおいしそうに食べているのに、大平さんだけが食べなかつたと。「何で食べないんだ」と誰かが質問したら、「いや、もう石油のことを考えたら、食事も喉に通らないんだ」と言つたんで、大爆笑になつて「そんなに心配しなくていいよ。われわれも、あなたの考えに近い線で助け舟を出すんだから、ゆっくり食事を召し上がってくれ」という話になつて、それで、その時に「これで打開の道が開けたな」と思つたと書いてあるんですが、そういうシーンがあつたのですか。

福川 そうだつたようですね。最後にカーター大統領が助け舟を出すのは午後ですけれども、午前中は激しいやり取りをやつて、それで食事に行つたわけです。それは、大平総理「自身も、食事は喉も通らんよ」と言つただだということを書つていましたね。後で伺つと、その日の朝、「血の小便が出たんだ」と言つていました。「昼食は本当に上の空、飯も喉に通らんといい心境だつた」とお話し

やっていましたね。「だけど、そんなに心配することないよ」と皆に言われたんだとも、言っていましたね。

——カーター大統領との友情というのが、ここで非常に大きな効果があったんでしょうか。

福川 その前の四月末から五月はじめの連休にワシントンに行っているわけです。その時にアメリカは日本にとって一番大事な国だから、日本の国土なり施設なりを是非、使ってほしいということ、日米安保体制の堅持ということ、合意をしたわけです。当時、電電公社の調達問題がより深刻になっていて、宮澤さんが尖兵として地ならしに行かれました。それが相当ひどくなると問題だということがあったんだけれども、これはそんなに深刻にならずに、首脳会談は終わりました。そこで、大平・カーターという関係は、かなり理解し合った。それが七月のサミットにプラスに働いたということではないでしょうか。

——分かりました。それで今度は直接、お役所の仕事ではないんですが、いわゆる政争のほうに入っていくわけですが、この五年の九月から一〇月にかけての総選挙で自民党は議席を減らすわけですね。それに伴って党内からの反対の声が高まってきて、いわゆる大福決戦ということになって、そこに至る四十日抗争というのがあったわけですが、この頃は大平さんはまだ元気だったんですか。

第二次大平内閣での長い外遊の実態

福川 お元気でしたですね。

実 — つまり、断乎、政権は譲らないと。例えば「辞めるといふことは、死ぬといふことか」と言い返したり何かしている。割合、元氣だったわけですが、選挙に負けた直後は、しばらく考え込んでいたんですか。

去 福川 私も総理のお供をして自民党本部に行っていました。開票が進んで行つて最初は非常に良かったんだけど、開票の後半になると、伸び悩むわけです。そして、「大変なことになったな。こんな善じゃなかったが」と言われました。当時は、一般消費税問題が、選挙中もいろいろ尾を引いていましたから、「やっぱり、こういうことか」と、一時はかなり弱気になった時期がありました。しかし落ち着いて考えてみると、議席は減つたけれども、第一党であることは間違いない。そうである以上、別に自分は責任をとることはない。この第一党という信任に応えるべきだ、という考えになつて行くわけですね。もちろん、その過程では田中角栄さんとも連絡を取り合っていましたし、それから、ここでは負けられないという気持ちに、だんだんたつたように思います。

— 福田さんと大平さんの両方が総理候補になつて、自民党の二人が国会で争うという形になつて、結局、大平さんが勝つわけですが、その頃は、かなり強い意志で……。

福川 ちょっと気が弱かつたのは、最初の一日か二日でしょうね。選挙が終わつて議員たちが東京に戻つてくる頃には、もうこれはキチンとやらないといかんという決意になつていた、と思います。

— で、乗り越えて第二次大平内閣ができるわけですね。それで今度は、いよいよ最後の段階になるわけですが、長い外遊がありますね。この時は、福川さんは一緒に行かれたのですか。

福川 ええ、一緒に行きました。

—— 一番の問題は、やっぱり疲れから、メキシコだと思うのですが、どうなんですか。

福川 まあ、そうかも知れませぬね。あの外遊はアメリカからメキシコへ行って、カナダへ行って、そしてチトー大統領が亡くなったのでベオグラードへ行き、ボンに回って日本に帰ってくるということですから、結局、二週間近くになりました。

—— メキシコは、エネルギー問題で、日本の総理がきてくれれば何とかする、というようなニュアンスが伝わっていたように聞いたのですが……。

福川 そうですね。当時、三〇万バレルの原油を供給する用意がある、というふうには伝えられていて、総理が行って話をすれば、それは可能だという情報が松永信雄駐メキシコ大使から寄せられていました。当時、永山時雄さんという通産省出身のシエルの社長も、しきりにそういう情報を持ってきました。そして、行けば大丈夫と言われたので、行くことにしよう、ということになった。アメリカ力で一応、カーター大統領との会談をやったのですが、その頃はまだテヘランのアメリカ大使館員人質問題が解決されていませんでしたので、イランから油を買う、買わないが問題となった時期があったのですが、その頃はもう日本はイランから油を買わないことを決めた後なので、比較的アメリカとの交渉はうまくいったのですね。しかし油が必要なので、メキシコに期待をもって行ったわけです。そして飛行機に乗ってワシントンを立てた頃から、少しずつアメリカに寄せられた情報から、どうもメキシコ政府はそれほど積極的ではないらしいということ伝えてくる人が多くなりましたね。新聞記者が「どうもそうでないみたいだよ」という話になって、到着してみてもメキシコのロペス大統領と会談してみると、決していい話が出てこないのです。当時、経済協力などお土産をいくつか持って

実 行ったわけです。それで、どうもメキシコは油を出しそうもないと。そうすると、この経済協力の案件はどうするのかというので、当時、大蔵省の加藤隆司国際金融局長、通産省の藤原一郎通商政策局長、経済企画庁の井川博調整局長、それに外務省の鹿取泰衛外務審議官が集まって御前会議になったのですが、局長同士でまとまらないわけです。というのは、経済協力をこれだけ用意してきたんだから、今ここで出しておけば、いずれいい返事がメキシコからくるから、協力はやっておくべきだという意見と、他方、油がもらえないなら出すわけにはいかない、そんな甘いことをしてはいかん、という意見で、まとまらないわけです。一二時になり一時になりで、総理の前で各省局長があんなに大喧嘩をするのを、私は初めて見ました。結局まとまらないで……。

——それを大平さんは黙って聞いていたわけですか。

福川 そう。黙って聞いていましたね。そして、もう少し先方の条件が熟すれば出すということにして、結局、そう臭わせて出さないと帰るということになるわけです。それで、大平総理は、ああいう人ですから、愚痴は言いませんでしたが、後から松永大使から長文の詫状がきました。それでカナダへ行くわけですが、メキシコからオタワへ飛んでいる飛行機の中で、チトー・ユーゴ大統領の死亡の連絡が入った。それでオタワとヴァンクーバーで日加首脳会議をやって、大平総理は、「俺、帰るよ」と言われたが、伊東正義官房長官から、「どうしても行って下さい」と言われて、あの時、加藤（紘一）官房副長官が付いていましたが、チトー大統領の葬式に参加することになったのですね。

——福川さんはユーゴまで一緒にいらっしやっただけですか。

福川 行きました。葬儀のあとシュミット西独首相と会うわけですが、二人はたいへん仲良しでし

て、「いい話だったな」と大平総理は言っておられました。メキシコという国は、ハイランド（高地）ですし、その前に四十日抗争でさんざん苦勞していましたから、やっぱり疲勞の極であったことは確かです。それに長い外遊で地球をぐるぐる回ることになったわけですから、たいへんでした。

——それで旅行は終わりまして、いよいよ政局はえらいことになって、（内閣）不信任案を食うわけですね。解散か総辞職かという時に、閣僚が閣議室に集まるわけですね。その時に、『回想録・伝記編』によると福川秘書官が（院内の）総理室へ入って行って、「閣僚がそろいました。閣議をお願いたします」ということを申された、というふうになっていますが、そうなんです。

解散から衆参同日選挙への心境

福川　　そうですね。その時には、竹下（登）大蔵大臣と伊東官房長官がご相談になって、「解散する」という話をされておられました。不信任になった時の大平総理の顔というのは、本当にいま思い出しても、硬直したというか、血の気の失せたというか、生気のないあんな顔を見たことは全くなかったです。声を掛けても硬直して返事がこないんじゃないか、と思ったぐらいでした。そして「閣議室へ」、「うん」ということで行かれた。その時は、もう本会議場の中でメモが回って、閣議をやる、そして解散ということに閣僚の意見は一致していたのではないのでしょうか。

——院内の閣議室というのは、細長い部屋ですね。官邸の部屋と違って……。

福川　　そうですね。

——あれ、総理は真中に座るんですか。

実 福川 総理は一番奥に座るんです。窓際のところ。

就 ———— それで解散になって、その時に大平さんは何か感想みたいなものを漏らしていましたか。それとも何か「しょうがないな」というようなことですか。

去 福川 やっぱ最初は、福田派、三木派に対して不信任感が非常に強くて。もちろん、解散して選挙に入るに当たって、党内にケジメ論がありました。党内からケジメをつけて公認するな、という意見が側近からも出てくる。福田派はA級戦犯だという意見さえありました。最初のうちは、そういうことでした。当時、政調会長が安倍（晋太郎）氏で、翌日、安倍さんが政調会長を辞めると、言いこられるわけですが、大平総理は安倍さんに対してあまり口は利かず、「しょうがないね」ということで会談は終わりました。一日たち二日たちするうちに「自民党のために」という意見が別のほうから少しずつ出てきて、「公認しない」とか「除名する」とかいうことには結局ならず、もう一回、自民党全体として選挙でケジメをつけようというムードになりました。で同日選挙でしたから、両方で燃えていて、戦犯論は何となく消えて行きました。

——— 別な意見というのは経済界からですか。

福川 自民党が一本化してやってもらわないと困るとい声ですね。それで、党内も落ち着いてくるといことになりました。

——— それで、いよいよ公示ということになって、最初に参議院が先行するんだと思うんですが、公示当日の秘書官の当番は於久（昭臣）さんだったんですか。

福川 選挙の時は、必ず於久さんが警備の関係で全部ついて行くことになっていて、それにもう一

人（秘書官の）誰かが交替でついで行く。だから二人体制で行くということにしてみました。それで、私がたまたまその時は一緒に行っていた。

——大平さんは最初、（自民）党本部で演説をやられた時は、それ程でもなかったんでしょけども、だんだん具合が悪くなってくるわけですね。

福川　そうですね。最初の朝の時はそうでもなかったんですが、新宿の演説時は全体で一五分ぐらいの予定の話の三分の二ぐらい行ったところで、声のトーン（調子）が変わり、声が出にくくなって、手すりにつかまるような感じになりました。だけどとにかく終わるまで喋って、遊説車から降りて、総裁車に乗ったら、大平総理が「喉の奥が痛いんだ」と言うわけです。そのうちに脂汗が出てきて、「苦しい」と言っんですよ。それで、党本部へ行って食事をするということになっていたから、とにかく戻った。そして総裁室のソファーに横になり、「暑い」と言っって、ワイシャツを脱いで、しばらく寝ていました。私は大平総理が以前に軽い狭心症をやったことがあるということを知らなかったのですが　森（一）秘書官は常時二ト口を持っていたそうなんですが　これは相当、悪そうだなと思ひ、「午後の遊説は止めましょう」と言っただけですよ。そうしたら大平総理は「そんなことをしたら大変だ。もう人を集めているんだらう。だから俺は行くよ」と言っって、食事もほとんど食べないで、たしかメロンを二切れかそこら食べたくらいで、出て行きました。

私は「これはいかん」と思ひ、医者の手配とかをするために午後の遊説には付いて行かないことにして、瀬田のお宅へ行きました。番記者が帰ってくる前に、掛かり付けの医者（鶴巻先生）に入っただいていたわけですよ。そして、六時半頃に大平総理がぐったりして帰ってきたわけだけど、医者

は「これは危ない」と言われた。それで、すぐ心臓病関係の医者を何人が呼び込むことになるわけですが、その時に医者番記者に見つからないようにするために、裏から入れるという算段をするわけです。「絶対安静、すぐ入院」というのが医者の判断でした。三人ぐらい医者呼び入れましたね。

——葛谷（信貞）さんがヘッドだったですね。

福川 そうですね、主治医ですから。それから朝日生命成人病研究所の藤井潤さん、もう一人は虎の門病院の山口洋さんです。それで虎の門病院へ入院させるわけですけども、当時から、救急車を呼ぶと全部、新聞社に盗聴されていると聞かされていまして、救急車はやめて民間の寝台車を呼んだんですよ。民間の寝台車というのは、結構あるんです。それを、私邸から少し離れた車庫みたいな所に入れておきました。それから、SPは付けないわけにはいかなないので、吉崎良宏さん（首席警護官）をこっそり呼んで、一人だけ付けました。そして一二時過ぎて番記者が「何もありません」ということで帰った後、寝台車に医者が付いて、吉崎さんが助手台に乗って虎の門病院に向かうことになりました。その時に、大平総理は「こんなことになっちゃったよ。でも、帰ってくるからな」とお手伝いさんに言っていました。

——福川さんは、その時、一緒に行かれたんですか。

虎の門病院での大平総理の容態

福川 いや行きませんでした。明日の遊説の取止めについて、新聞各社と連絡を取らなければならぬ、ということでしたので。於久さんと吉崎さんが虎の門病院へ行った。

—— 取止めについて各社は、どうしたと言ったでしょう。

福川　とりあえず過労のため数日間、休養ということにしたのですが、思わぬことが起こりました。共同通信社が虎の門病院の側でしょう。後で聞いたのですが、共同通信の記者が帰りがけにSPに行き会っちゃって、「あんた、何でこんな所にいるんだ」ということになったのだそうです。それで、これはおかしいということになったのです。病気がか一切言わずに、過労だからとか遊説取止めと言ったのですが、それで夜明けまで大騒ぎになりました。結局、入院と言わざるを得なくなったのですが、そこで、入院の理由をどう言うかがまた問題になりました。「一過性の虚血症」という、嘘ではないが真実でもないという言い方を、医者に認めてもらって、入院して療養すると発表することになった。それから、ベネチア・サミットに行くか行かないかという騒ぎに移って行くわけです。

—— 総理番の記者たちと二分ぐらい記者会見をやりますよね。あの時は、福川さんはおられたんですか。福川　いました。

—— その時は、どんな具合でしたか。一応、浴衣みたいなものを着て、写真もとる、総理番が「代表して見舞いにきました」「おう、「苦労さん」と。その時の応対はどうでしたか。

福川　あの時は、だいぶ元気になって、医者も「五分ぐらいなら、いいでしょう」ということで、質問は多分三分ぐらいだったと思いますけれども、それには比較的落ち着いた応対をしていて、「ああ、だいぶお元気ですね」というのが番記者の印象でした。

—— 医者は、それも「疲れるといけないから、止めたらどうですか」というようなことを言ったとか……。

実 福川 医者は、そんなことはないほうがいいと言うんですけれども、最後は「まあ短時間ならやっ
就 ていいでしょう」ということでした。

華 —— 福川さんが傍目でみておられて、少しずつ落ち着いてきたというか……。

去 福川 そんな感じでした。少しずつ落ち着いてきて、顔色もだんだん良くなってきて、結構いろいろ

な話もしましてね、「おい、石油の値段はどうだ」とか「物価は上がっているか」とか尋ねられました。

—— それで一日の夜は、木村（貢）さんと於久さんが交替であそこ（病室）におられたわけですが、福川さんはどこに……。

福川 私は自宅におりました。それで容態急変という電話があつて、夜中の一二時過ぎに、病院へ
とんで行きました。私の家にも新聞記者が毎晩きていましたから、「今日は何もありません。さよう
なら」と言つて帰つてもらつてから、一五分ぐらい後に電話がかかつてきたのです。

—— それで駆けつけた時は、もう……。

福川 人工呼吸をやっていました。それで（総理大臣）臨時代理の手続きをしなければいけないわ
けですね。これを、生きておられるうちにしておかなければなりません。かねてからの意向に沿つて
「伊東正義を臨時代理として指名する、大平正芳」という書式をまとめました。

—— 二度にわたつて秘書官を務められて、感じられたこともいろいろあつたと思いますが、福川さ
んが通産省出身だからというわけじゃないんですけれども、大平流の経済哲学というのは、側で見
ておられて、いろいろ印象深いものがあつたと思うんですが、また今日的に生きるものもあると思
うんですが、どんなふうな感じでしたか。

「複眼思考」で「思索の人」だった

福川 最近よく言われるようになりましたが、自己責任、自律判断というものを、経済運営、経済に携わる者は、重視すべし、ということだったと思います。あの頃、「護送船団」といつてみたり「横並び」といつてみたりしていますけれども、今から思うと、当時は、政府には業界の面倒を見てやりたいという気持ちがあり、民間には政府に寄り掛かりたいという気持ちがあったりする中で、自己責任、自律判断で、経済主体は動いて行くべきものであるという意見は新鮮でした。政府というものは、必要最小限度のものしか関与をしない、これが経済社会が一番うまく行く源泉だという認識を持つておられたような気がします。

——政府は割合、後ろのほうに控えていて、民間主導にしないと……。

福川 その代わり民間は責任を持つ。失敗をすれば責任をとるということで、その持場、持場でチンと判断と責任を全うして行くというのが、経済はうまく行くんだという信念のような気がしますね。それから、絶えず新しいものに挑戦をして行くという気持ちを持つておられた。技術政策、技術力を重視し評価しておられた、という印象は受けました。多分、新日鉄の合併問題も、そういう技術力ということを大平総理は一番、認識していたように思いますね。残念ながら大蔵省が一番、最後まで業界のお節介をやいたので、今、金融が非常におかしくなってしまうと言えるかもしれません。ですから、そういう意味では、通産省は大平総理に助けられたというところはありますね。

実 — それからもう一つ、側におられて感じた、人間・大平正芳というのは、福川さんにとっては、就 どういうふうな感じの人でしたか。あるいは福川さんが大平さんからインプレスされたことというのは……。

去 福川 絶えず事象をできるだけ客観的に見て真剣に考える方だったと思います。目線を変えて高い所から見たり低い所から見たり、それで絶えず事態の先行きを予測して、対応は慎重に考えて行くという、言ってみれば深謀遠慮というか思慮深いというか、物をよく考えていくという「思索の人」でした。今、政治家の中で、理念がある政治家が少ないというけれども、大平総理は、心棒がしっかりとっていて、非常に思慮深い、そういう印象を非常に強く受けます。「複眼思考」という答えもあるかも知れませんが、思い込みとか、人に言われたから動くということはない方です。それから表現を非常に大事にする人でした。自分の思想をどうやったたらうまく人に伝えられるか、ということを決えず考える人でした。そういう意味では、理念があり、思慮深く、表現に説得力があるという、政治家にとって一番大事な資質を持っておられた方であった、と思います。

(平成二二年一月一八日 電通総研会議室で取材)